

## 中国語論説体読解力養成授業システム (通称『レベル』)開発の試みとその成果について

三瀧正道

はじめに

本稿は、過去 20 数年間にわたる教育実践の成果をまとめたものである。当初の初歩的な取り組みから、長い年月をかけて改良を重ね、漸く現在の形式に定着した。

完成した“レベル”式トレーニングは大方の支持を得て、現在では他大学はもちろん、市民向け講座・企業人向け訓練講座・全国ネットでの通信教育にまで発展し、毎年延べ 300 人以上が受講、その中からレベル 30 を突破した者で構成するプロの翻訳者を目指す集団『而立会』が誕生した。

今では年平均 5～8 名ほどの新会員が誕生し、会員総数は既に 40 名を突破、研鑽を重ねながら、継続的に翻訳書を出版できる体制を整えつつある。

### [一]早期の読解力養成の意義

かなりの人が持っている 2 つの誤解がある。1 つは、「中国語の発音や会話もできないのに読解力が身につくはずがない」というもの、今 1 つは、「日本の英語教育は過去、読解力の養成にのみ傾き、その結果が“会話に弱い日本人”をつくってしまった。したがって、中国語教育においてもまず、会話力をしっかり養成しなくてはならない」というものである。

前者については、この『レベルシステム』の成果がその誤りを真っ向から証明している。発音や会話力と論説体読解力の向上には顕著な関連性もなければ、学習上のあるべきプライオリティもない。麗澤大学の実践で証明されたことは、大学に入学して初めて中国語を学んだ学生でも、1 年間中国語の基礎を勉強した後、2 年生になって真面目に取り組めば 1 年間でほぼ新聞を読めるようになってしまう、ということである。

これによって麗澤大学の学生の場合、3 年生からの後期課程で、原文で書かれた文章やインターネットを駆使して研究が進められるようになり、日訳資料にばかり頼らざるを得ない状況から脱することが可能になった。

現在、日本の大学では、大学院でさえ原文をまともに読みこなせない中国研究者の卵が多い。これでは質の高い研究は望めないし、急速に変化する中国を理解することは到底不可能である。

後者は、コミュニケーション力を重視した考えによるもので、過去にはそれなりに説得力があった。しかし、現代のようにインターネットが益々発達し、ネットを通じてのコミュニケーションや情報収集活動が飛躍的に発達する中、“読めること”の重要性もまた以前とは比べものにならないほど高まっている。

余談になるが、昨今、日本の大手企業で中国に進出を果たしていない企業はむしろ少数に属する。一方で、そのような日本を代表する大手企業でさえ、中国の新聞や専門業界紙あるいはインターネットから直接情報を取れる日本人社員は数えるほどしかいないし、ほとんど養成してもいない。情報を先取りする重要性がますます高まっている今日、この状況は何とか打開しなければならない。

## [二]レベルシステム開発の動機

筆者が大学で中国語を学んだ昭和40年代の中国語教育では、現代中国語を話し言葉と書き言葉(ここでは特に論説体を指す)に分けて、その違いを明確に提示して教える授業はほとんどなかったといってよい。したがって、学生は“您好”“多少钱”などという初歩的な会話表現や会話文を学んだ後、すぐに人民日報などの文を与えられ、特に話し言葉との違いを喚起されることもなく学習していった。

英語においては既に時事英語というものが1つのジャンルとして確立されていたが、当時なお、中国語にその影響が及ぶことはなかった。

したがって、学生は両者の区別をほぼ意識せず混合されたまま習得することにより、TPOによる使い分けができず、論説体的表現とかなりオーバーラップする公式スピーチの通訳などでラフな口語表現を使ってしまい、結果として大恥をかくケースが後を絶たなかった。

筆者もまた80年代初頭に当時の総理府の訪中団に同行し、その面での勉強不足を痛感した1人であった。その経験から、中国語教員たるものの責任として「何としても教室で学生にその違いをはっきり教えなければならぬ」という認識を持つようになり、レベルシステム開発の動機へとつながったのである。

とは言うものの、それまでの論説体教育といえは単なる講読形式しかなく、一体どういう教材を開発したらいいのか、当初は全く五里霧中であった。

## [三]システムの開発へ

### 1) センテンスへの分解

文章をそのまま学生に配布して頭から読解していくというやり方を変えようとする、当然のこととして、ばらばらの文に分解してまずセンテンスの読解から、ということになる。この時点から難問にぶつかった。学生時代、恩師の有馬健之助先生に質問に行くと必ず「前後の文章を見せたまえ。中国語は前後とのつながりがわからないと意味が確定しない場合が多い。」と言われた。「先生ほどの学識を持ってこの慎重さが必要なのか」と内心驚いたことを今も鮮明に思い出す。これに関しては単にテンスの問題に限らず、具体的な意味内容にまで波及することが珍しくないことも周知の事実である。その中国文をセンテンスだけ切り取って与えることのリスクをどうするか、というのが最初の問題であった。

中国語の最大の特徴の1つは意合法にあるといってよい。

日本語では、

「私は腹が減った。しかし金がない。ところがあなたはお金を持っている。だから、もしあなたが私と一緒に食事に行って、おごってくれるなら、私はとても幸せだ」

と言う。

中国語はこうは言わない。こんな短いフレーズの接続は、おのずと意味の流れから汲み取ればいいので、いちいち接続詞を入れれば却ってくだい文章になってしまう。だから、中国人はこういった文を日本語で言うとき、中国語の語感そのままに接続詞を省略し、ついでに面倒くさい日本語の助詞も省略する。

「私、腹減った。金ない。あんた、金ある。一緒食べ行く、あんた、おごる、私、幸せ」

この点から考えると、中国語ではまずフレーズとフレーズのつながり方を読み取ることが非常に重要になってくる。文と文とのつながりはその延長上にある。そこで文を選び出すときに細心の注意を払うことを前提に、センテンスの切り取りを断行することにした。

その後 20 数年間の実践の中で、前後がないと確定しにくい文をうっかり出題してしまっただけが皆無とは言えなかったが、大きな問題としてクローズアップされることはなかった。

## 2)材料の調達

この点はさして考える必要もなかった。選択の余地がほとんどなかった、と言った方が正確かもしれない。

論説体となれば当然新聞か雑誌になるが、当時最もポピュラーな、といえば人民日報に他ならなかったし、なにより、改革開放が始まり次々と新語が出現する中で、恣意的に作られ泡沫のように消えていく新語なのか、それとも認知されて教材として扱う基準に適している語かの判断が求められ、となれば新語に対し相応のチェックが行われている人民日報に如くは無し、と考えるのは至極当然の結果だった。

## 3)進歩の度合いを確認するシステム

受験勉強で国語や英語の読解力を強化しようとしても、自分の進歩の度合いが目に見えてわかりにくいため、自分が今行っている勉強方法に疑問と不安を持ち、モチベーションの持続に悩んだ経験を持つ人は多いだろう。

この不安を解消し、やる気の持続を図らなくては、どんなにいい教育方法も絵に描いた餅になる。そこで考えたのがレベルを設定し、一定の成果を挙げたら次のレベルに進める、という形で達成感を持たせることであった。それも大まかなものではなく、かなり細かに多くのレベルを設定し、努力すれば頻繁に昇級できるようにして、向上する喜びを度々感じられるシステムにしなければならない。

こうして、まず 10 段階くらいを設置しよう、ということ考えた。そこで第 4 の問題が浮上した。

## 4)難易度の設定

ここでヒントになったのが上述の意合法である。どんな言語でもセンテンスが長くなればそれなりに難易度が増すことが考えられる。しかし、日本語のように接続詞が完備されている言語では、文が長くなることによってさほど急激に難易度が上昇することはない。

しかし中国語の場合は違う。文が長くなればフレーズが増え、そのつながりを読み取る能力が要求される度合いも当然等差級数的に増える。時にはそれが絡み合うことで等比級数的にさえ成り得る。

こういった判断から、文の長さを難易度を定める物差しの 1 つとして採用することにした。そこで人民日報の文の長さを字数によって調べてみた。当時の記

録では、いくつかの紙面で統計を取ったところ、大まかな比率は以下のようなになった(ちなみに、今回の執筆にあたり、再度いくつかの紙面で同じ調査を試みたが、最も多いのはやはり 40 文字前後で、ほぼ同じ比率が得られた)。

0 ~ 30 文字 : 31 ~ 50 文字 : 51 ~ 70 文字 : 71 ~ 90 文字 : 91 文字以上  
1 : 2 : 1.5 : 1 : 0.5

その後、人民日報から毎週の問題を抽出する作業を長年続けてわかったことは、やはり基本的な長さは 40 ~ 80 文字前後であること、政治・思想・文学批評のような文章は 100 文字以上もかなりあるが、一般記事の歯切れの良い文章は概ね 20 ~ 60 文字程度で、100 文字以上の文はまずお目にかからない、ということだった。

こうして、文の長さによってレベルを 5 段階(20 文字前後/40 文字前後/60 文字前後/80 文字前後/100 文字前後)に分けることとし、更に同一の長さでも文構造の難易度によって 2 段階にわけ、以下のような 10 段階をセッティングした。

レベル 1:1 センテンス 20 文字前後。構文が比較的易しい。  
レベル 2:1 センテンス 20 文字前後。構文が比較的難しい。  
レベル 3:1 センテンス 40 文字前後。構文が比較的易しい。  
レベル 4:1 センテンス 40 文字前後。構文が比較的難しい。  
レベル 5:1 センテンス 60 文字前後。構文が比較的易しい。  
レベル 6:1 センテンス 60 文字前後。構文が比較的難しい。  
レベル 7:1 センテンス 80 文字前後。構文が比較的易しい。  
レベル 8:1 センテンス 80 文字前後。構文が比較的難しい。  
レベル 9:1 センテンス 100 文字前後。構文が比較的易しい。  
レベル 10:1 センテンス 100 文字前後。構文が比較的難しい。

#### 5) 難易の尺度

当初は主として介詞構造を含む文を難度の高い文としたが、その後、添削を続けるうちに「学生が何を難しいと感じ、また何処で間違いやすいか」が次第に明らかになり、それによって易しい文、難しい文の尺度も変化していった。学生が難しいと感じる原因には少なくとも以下の諸要素がある。

中国語は字が一定間隔で並んでいる。したがってどれが単語かが見分けられない。

例: 发展中(発展の中で)

发展中国(中国を發展させる)

发展中国家(發展途上国)

中国語は形態変化がないため、品詞の区別が難しく、文の成分の判別も難しい。

例: 科学发展 「科学が發展する」か、それとも「科学的發展」か。

構文を知らない。

例: “要~, 要” は「~しようとするなら, しなければならない」

論説体独特の文法や修辞法を知らない。

例1: “的”の省略。書き言葉の場合、短いフレーズの中に複数の“的”を用いることを非常に嫌う。したがって、“的”が複数ある場合は最も重要な1つを残し、他は省略する。標語や法律名などになるともっと極端で、全く“的”を使わない場合もある。

邓小平建设有中国特色社会主义理论

(鄧小平の中国的特色を持った社会主義を建設するという理論)

例2: リズムを整えるための4文字化に使う様々な小道具 “加以” “得到” など。

ある語彙についての先入観による誤訳。

(ア)日本語と同一表記のため、日本語の意味で解釈してしまう。

例: “部署”をすべて「部署」と名詞に訳す。動詞である可能性を考えない。

: “协议”を「協議」と訳す。「合意」「協定」という訳語が出ない。

(イ)既習語彙の場合、前出の意味で解釈し、他の意味を考えない。

例: “会”を「できる」, “不能”を「できない」と訳し, 「~のはずだ」

「~してはいけない」という訳語が出ない。

時事用語を知らないためわからない。

例: “基地”はアルカイダ。

社会の事象に対する知識が欠けているためわからない。

## 6)各レベルの1回の出題数

合計字数などを考え、レベル1と2は4題、レベル3と4は3題、レベル5以上は各2題とした。これは至極適切だったようで、当初から今に至るまで一貫している。

## 7)問題の選定

センテンスの字数をいちいち数えなくてはならないのも煩瑣ではあったが、様々な語彙に接するには様々な方面の文に触れたほうが良い。そのため、私の中に幾つかの暗黙のルールが生まれた。

1. 1つの記事からは記事の大小に関わらず、原則として1つの文しか採取しない。多くても2つを限度とする。
2. 政治・外交・法制・農村など紙面によってテーマが異なり、文の趣も甚だ異なる。したがって、1つのページからの採取は2つまで、多くて3つを限度とする。
3. それぞれの回の各レベル内の問題は極力同じジャンルの記事から採らない。また、同じ構文は避ける。

今では人民日報も16面になったので、大体は1日分の新聞から1回分の問題(レベル1から10の問題すべて)を採取できるが、当初はページ数も少なく、2日分丸々読んでやっと問題が揃う状況だった。1回分の問題を採取するのに要する時間は、熟練した現在でも2時間はかかる。その後、その新聞をコピーし、問題を

切り取り,B4の紙に貼って問題用紙が完成するのに更に1時間かかる。併せて3時間が毎週の問題づくりの所要時間となった。

ここで例として平成18年2学期の出題の中から第4週目の問題を紹介し,併せてレベル2とレベル4について,その文がレベル2・レベル4に属する理由を説明する。

## 平成18年度 2学期レベル第4回問題

### レベル1

- 1.部分企业过分依赖负债扩大规模。
- 2.60年前,世界上第一台电子计算机诞生。
- 3.中国汽车也要不要有自己的品牌?
- 4.近期以来,广州市刑事案件发案率有所下降。

### レベル2

- 1.佛罗伦萨无愧于艺术都城之美誉。

書き言葉は“于”を多用するが,その用法は様々である。

- 2.国家统计局19日向社会公布了中国制造业500强。

“向”を用いた介詞構文。

- 3.与其他国家的新闻记者相比,我是幸运的。

“与~相比”の構文。

- 4.在公路两旁植树是一种功在当代,利及千秋的好事。

数量詞が名詞の修飾語の先頭に置かれる中国語の特徴的構文。

### レベル3

- 1.20年前的8月21日,邓小平同志视察天津经济技术开发区时挥毫题写了“开发区大有希望”。
- 2.无锡新区所处的梅里地区,是我国吴文化的原生地和核心区,拥有丰富的历史文化遗产。
- 3.“让中国的运动健儿穿着中国品牌的服装登上世界的领奖台”,这是李宁先生创办李宁公司的初衷。

#### レベル4

1. 从今年秋季开始,云南省将在所有省属高校中新增开设有关东南亚, 南亚方面的课程。

“从~开始”と“有关~的”の構文。

2. 国际经验证明,对就业影响最大的因素是经济增速, 而不是贸易顺差的增速。

“~证明”の言い回しと“是~,而不是”の構文。

3. 多年来, 彩电业的竞争不仅体现在国内企业之间,还体现在与洋品牌之间。

“不仅~,还”の構文と“体现在~”[動詞+“在”+場所]の文型。

#### レベル5

1. 他希望山东省,青岛市在今后的工作中继续给予北京大力的支持和帮助,共同努力,把2008奥运会办好,向世界展示中华民族生机勃勃的精神风貌。
2. 中国女足原本就具备一定实力,是世界五强之一,她门在比赛中防守一直都十分出色,投手能力也为人称道,在速度和技术上都颇有心得。

#### レベル6

1. 汽车涉水行驶前,必须仔细查看水的深度,流速和水底情况以及进,出水域的宽窄和道路情况,由此来判断是否能安全的通过。
2. 许多城市搞所谓的现代化建设,将小商小贩,人力车,街头摊点,小店小铺等等,或拆迁,或整顿,一扫而光,代之起来的是现代化的百货商店等。

#### レベル7

1. 贵阳曾是全国3个酸雨最严重地城市之一,空气中二氧化硫含量一度超过国家2级标准两倍多,一条全长118公里穿城而过的南明河,每天吸收45万吨污水和工业废水。
2. 8月16日,北京银行大兴支行正式开业,成为该行抢滩农村金融市场的标志,也是城市商业银行走出城市,服务新农村建设,完善农村金融组织体系作出的一次尝试。

## レベル 8

1. 一位不愿透露姓名的中国音乐著作权协会的工作人员指出,虽然协会多年来一直在做收费工作,但在落实过程中阻力重重,首先就是大多数卡拉 OK 经营企业对本应支付的词曲著作权费完全没有概念。
2. 在香港,无论是开店还是设厂,创业者一旦“入行”,通常都不会感到“孤单”,因为各行各业都有自己的行业协会,而维护会员权利,帮助行内企业发展壮大正是行会的主要任务。

## レベル 9

1. 广州是一座常住人口加流动人口达千万的特大型城市,让人们群众安居乐业是各级党委,政府的重大责任,给市民安全感是建设适宜工作创业,适宜住生活“两个适宜”城市的重要基准线,人民群众对治安状况的满意度是检验领导干部政绩的重要标准。
2. 本报堪培拉 8 月 20 日电 记者李景卫报道:澳大利亚目前正在南极的冰天雪地里修建一条机场跑道,准备开通澳大利亚至南极的空中客运,从而改写人类乘船只,运输机前往南极进行科学考察和旅游的历史。

## レベル 10

1. 贝多芬博物馆如果算上他出生的那层斜窄的阁楼,算是一座四层的小楼,楼的前后虽没有太大的花园,却显得非常幽静,绿地里矗立着很多贝多芬的塑像,他们出自不同时代的不同艺术家之手,有些甚至是贝多芬生前的挚友。
2. 从 2007 年起,沈阳市所有学校都要按比例设置专业技术岗位;凡晋升上一级专业职称的教师必须具备异校交流任教一年以上的经历;评选特级教师以及市以上先进教师,必须具有异校交流经历;其它层级的评优评先,也要在同等条件下,把交流经历作为优先考虑的依据。

\*一目瞭然だが,レベル 2 は難度に関わる項目が 1 つであるのに対し,レベル 4 はそれが 2 つになっている。レベル 6, 8, 10 となるとそれが更に多くなって複雑に絡むことが難度を増す最大の理由であり,このことから,読解力の養成の第一歩として,まず難度に大きく関わる項目を一つ一つ学習させ,その上でこれらが複数絡む文例による訓練をすることが効果的だろう,と推察される。

## 8)採点基準

当初若干の試行錯誤はあったが,試行期間を経て以下の基準が出来上がった。

- 0.1:簡体字の直し忘れ。軽微な漢字の書き違い。説明訳。
- 0.2:助詞の間違い(“が”と“は”の間違いなど)。単語訳の軽微なズレ。
- 0.3:単語の完全な意味の取り違い。単語の訳し忘れ。
- 0.4:同上がフレーズレベルで他に影響を与えている場合。
- 0.5:フレーズレベルでの構文の取り違い。動詞や介詞の係る範囲の間違いなど。
- 0.7:文全体の構文を取り違えているが、何とか大意はつかめる場合。
- 1.0:文全体の構文を取り違え、文意が伝わらない場合。
- 1.5:2つの構文が同一フレーズ内で絡み合った文で、両方の構文を読み違えている場合。
- 2.0:あるフレーズの訳が全く欠落している場合。

#### [四]競技ルールの確立

##### 1)1 クールの回数

1学期は15週を基本としている。このレベルシステムも15回を1クールとすることにした。本来これは大学の授業回数を基準に便宜的にそうしたに過ぎなかったが、長年の実践結果から、これが偶然にも実に程よい回数であることがわかった。なんとも僥倖としか言いようがないのだが、逆にそこから中国語読解力養成方法確立の大きなヒントが与えられた。

1つのレベルの合格基準は10点満点で、8.0以上だった場合に上のレベルへの進級が認められるのだが、毎回の学生の進級具合を見ていると、真面目に取り組んだ学生の場合、判で押したように11回目か12回目あたりから急激に実力がアップし、レベル8を突破する。この現象は毎年変わりがない。

学生にとってレベル8は最大の難関で、多くの学生がここで随分足踏みをする。言い方を変えれば、ここを突破した学生はいわゆるホンモノになり、原語による資料を自分で読みこなせるようになる。その結果から判断すると、1回分の問題が上に示したボリュームの場合、10回もやれば、一見難しそうな論説体の文も必要な基本的語彙や構文に一応お目にかかることができるようだ。もちろん慣れもあろう。その結果、15回で相当の成果を上げることができる。

ただ、それゆえの悩みも出た。年によって15回の授業回数が確保できず、13回、最悪の場合12回で終わってしまうケースがある。そうすると、やっと目に見えた成果が出始めるところで終わってしまうからこんな残念なことはない。最近は何回かの少ない曜日については振り替え授業が行われるようになったので、以前ほどではなくなったが、それでも15回の確保は依然難しい。

##### 2)時間配分とその他のルール

1コマの授業は90分であるが、そのうち30分は前回のプリントの説明に必要である。したがって学生が問題にチャレンジする時間は1時間としている。更にいくつかのルールを設けているが、それらのルールを学生配布用プリントから抜粋する。

## ルール

ワンクールが 15 回で構成されています。毎年度 2 回、開講されます。

前期は 4 月～7 月、後期は 9 月～1 月です。

第 1 回は全員レベル 1 からスタートします。制限時間は 1 時間です。

各レベル 10 点満点で、8 点以上だと次のレベルへ進めます。その日、最初にスタートしたレベルの結果が 1.9 以下だと、1 レベルダウンします。

1 つのレベルをやり終わり、時間と自信のある人は、次のレベルに手をつけてください。うまくいけば 1 回で何ランクもアップできます。なお、次のレベルの結果が 1.9 以下でも、筑点されているということは、前のレベルが合格ということですので、当然、今回は、その 1.9 以下だったレベルから始められます。

いくらたくさんやってあっても、前のレベルが合格しない限り、次のレベルは添削しません。

レベル 10 を突破すると、また、レベル 1 へ戻ります。その際、合格ラインは 9.0 以上になり、便宜的にこのレベルをレベル 11～20 と呼びます。レベル 20 を突破すると、またレベル 1 へ戻ります。その際、合格ラインは 9.5 以上になり、便宜的にこのレベルをレベル 21～30 と呼びます。

15 回でレベル 30 を突破できなかった人は、次回また、レベル 1 からの挑戦になります。

### 3) 答案の返却、他

学生の答案は全て克明に添削し、減点数をいちいち明記して返却する。4 回終了ごとに復習テストが実施される。問題形式は定型化している。

[一] 問題文そのままの日訳 (40 点)

[二] 単語の日訳。10 題 (20 点)

[三] 単語の中訳。10 題 (20 点)

[四] 単語の発音表記 10 題 (20 点)

### [五] レベル授業の成果

#### 1) 学生の実力の向上

レベルに 11 以上が登場したのは平成 5 年の 2 学期からである。それまで学生にとって、レベル 10 突破はまさに憧れの目標だった。当時、レベル 10 を突破した学生が小躍りする姿が印象的だった。

実際、レベル 10 突破の実力は相当なもので、私が非常勤をしている東京の某大学では、同大学や他大学の大学院を中国語で受験したい学生が過去相当数もぐりこんできたが、レベル 10 を突破した学生で不合格になった者は 1 人も報告されていない。

また、現在まで、東洋史とか中国の経済や環境問題を研究している幾つかの大学の院生が、さらに読解力を高めたい、と人づてで参加したが、留学籍が有ったり、HSK で 8 級以上を取得していても、まず、レベル 10 にすぐには合格しない。したがって、大学 2 年生でレベル 10 に合格することは相当の実力であり、当初は合格した学生は残りの授業日数への出席は免除していた。

ところが、毎年実施していることで学生の意識が高まり、また先輩からの啓蒙もあり、学生の成績がどんどん向上した。特に2学期からのクールでは、再度レベル1からスタートするルールではあったが、既に1学期に1回経験しているので、レベル10突破者が急増していった。

平成5年の前3年間の数字を挙げると、その成果がはっきり見て取れる。

	履修学生数	レベル10突破者	レベル10到達者
平成2年2学期	39名	4名	8名
平成3年2学期	42名	7名	8名
平成4年2学期	40名	11名	17名

\*この成果には別の面からのサポートもある。平成2年に、筆者が朝日出版社から『現代中国拡大鏡 - 绿色通道 - 』を刊行したが、これをレベル学習の自習用教材として積極的に活用したことによる効果も見逃せない。

こうした状況を踏まえ、平成5年の2学期からまず、レベル11~20が設定された。基準は上述のとおりである。それから5年して、また似たような状況を経てレベル21~30が誕生した。

こうして学生のレベルアップが進むとともに、嬉しい誤算もあった。単位にならないのに、3,4年生になってもこの授業に参加する学生がどんどん増加したことである。

正規の2年生は学科定員の60名前後なのだが、平成18年1学期、参加学生数は91名に達し、平成19年1学期には100名を超えた。授業が重なって参加できない学生の要望に応え、個人研究室の前に投函用と返却用の郵便ボックスが設置されて数年になる。これを使って学生と答案のやり取りをしている。

## 2) 社会人への波及

平成10年ごろから大学の授業に社会人の聴講生が増え始めた。彼らは学生と違い卒業がないので何度でも挑戦する。その中から漸くレベル30突破者が現れたのが平成14年であった。そして年々突破者が増え、その突破者から更にプロの翻訳者を目指して勉強を続けたい、という要望が寄せられるようになった。

こうして平成16年に発足したのが而立会である。レベル30突破に因み、孔子の言“三十而立”から引用して“而立会”と命名した。而立会のその後の発展については、本論の「はじめに」で述べた。既に日本僑報社から『氷点停刊の舞台裏』、『今、中国が面白い』などの翻訳を出版している。

特筆すべきは、平成19年春に卒業した3名の学生が在学中既に而立会に入会を果たし、在学中からこの翻訳に参加したことであろう。いずれもが高校段階で少し中国語に触れただけか、大学入学後初めて中国語学習を開始したもので、レベル学習を始めた20数年前には予想だに出来なかったことである。

社会人、特に企業人の研修も数年前から始まった。中国ビジネスが盛んになるにつれ、企業でも「読める人材」育成のニーズが高まり、毎週金曜日の夜2時

間、企業人向けレベル学習を始めた。数年を経て、ここからもレベル 30 突破者が出た。いずれも社内で中国語学習を始めてわずか数年の人たちである。

その効果は劇的といってよい。読めることでインターネットから自由に中国語でニュースや情報を獲得できるようになり、その結果、現地からの情報の質を厳しくチェックできるようになったのである。

某家電大手企業は平成 19 年 4 月にそのうちの 1 人を本社の営業本部長に抜擢したが、レベルの成果がその抜擢に何がしかの貢献をしているかもしれない。別の IT 大手企業でも成果が出つつある。特に特許関係の部署では、それまで中国人任せだった資料の解読にレベル学習者が参画しつつある。また、中国との交渉においても、日本人社員が文書チェックできるようになり、モチベーションが上がっているという報告があった。

ただ、企業の場合、問題点もある。企業人の場合、レベルをやって 3 年目になると飛躍的に力が伸びる。しかし、ほとんどの企業が上司の許可が 2 年までで、そこで打ち切られてしまう。いよいよというところでそれまでの研鑽が全て水の泡になる。この点の理解をどうやって深めていくかは今後の大きな課題であろう。

一般人の通信による参加者も増えている。2007 年は 30 名を超えた。官庁、通信社、教員、通訳者、翻訳者、編集者、企業幹部など既にプロとして活躍している人の参加が増えている。目に見える実践的な養成システムが求められている証左と言えよう。

## 結語

平成 19 年、1 学期、半年間だけで大学、社会人など全てのレベルへの参加者がついに 200 名を突破した。

添削するほうも体力の限界に近づきつつある。そこでこれまでの成果をまとめ、翻訳力養成の自学教材を製作しよう、という試みを平成 18 年から開始した。

過去の膨大な出題文は既にカード化していたが、時事問題が中心という点と、中国語の変化の速さに鑑み、ここ 10 年余りのカード、1 万数千枚に限定してデータベース化する作業を始め、既に打ち込みは完了した。現在、これを元に検索ソフトを開発中で、これが完成した上で自学教材を編集する段階へ進む予定である。本稿は実践結果をまとめたものであり、したがって特に参考文献は提示しない。また、注に相当する内容は全て本文中に収録した。